

川俣美術百周年

川俣町の文化活動の源泉「川俣美術」。その活動は美術のみならず演劇や音楽、染物など川俣町のさまざまな文化に影響を及ぼしたと言われています。では「川俣美術」はどのようにして誕生し、どう変化してきたのか。今月号ではその歴史を紐解くとともに「川俣美術」現会員にお話を聞きました。

黎明期



川俣風景(阿部七郎)



のし(高橋歌子)

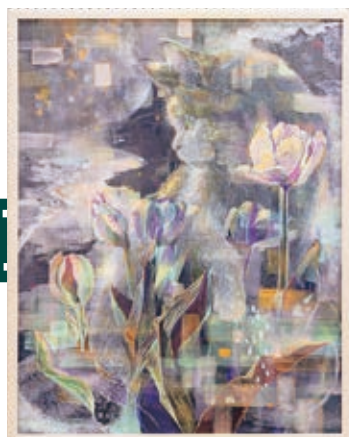


御霊神社(三浦清兵衛)

コバルト社^{時代} 1926年

- ・コバルト社設立 (1926年)
高沢和作、三浦清兵衛、渡辺善之助、高橋啓二郎、佐久間重郎、丸樹長三郎、服部庸の7名で設立。
- ・第1回展を開催 (1926年)
第1回展を川俣染織学校で開催。

- ・石井柏亭、松島一郎を
川俣に招き研究会を開催



春の気配(菅野智美)

- ・楓の風展を開催 (2018年)
川俣高校100周年事業として「楓の風展」を開催し、約100名の参加があった。



刻(自画像)(斎藤三男)

2025年

- ・川俣美術百周年



丸樹長三郎と
コバルト社設立

今年で100周年を迎える「川俣美術」。その始まりは機屋の一人息子として生まれた丸樹長三郎が「コバルト社」を設立したことからでした。時を遡ると大正時代、川俣町にも文化運動の流れが入り込んで来ていました。鉄炮町には本格的な本屋が開店、そのほかにキリスト教会が建てられたり、洋画の個展が開かれたりと大衆文化の発展がより活発になっていました。1900年、町内で生まれた丸樹は子どもの頃から病弱でしたが絵を描くことが好きだったといひます。丸樹の父、長吉は羽二重工場を経営していましたが、丸樹は家業を手伝う傍らキリスト教会に通い絵画や文学に関心をもち始めていました。その後、丸樹は画家を志し1920年に上京し、本格的な洋画の勉強に励みましたが、結核に感染し1925年に帰郷。家業を継ぐ一方で文化活動に身を投じ、渡辺善之助など6名と「コバルト社」を設立しました。



機織る人(寺沢可奈子)



浮遊ーブロワ (西村榮悟)

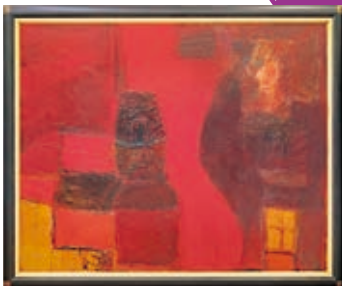
ラ・パレット^{時代} 1948年



川岸
(渡辺孝)

- ・ラ・パレットに改名(1948年)
新規会員の加入に伴い改名。
第1回展を開催する。
丸樹長三郎、片寄為次郎、西村榮
悟、渡辺孝、岡司義夫、高橋歌子、
高橋一蔵、渡辺精二、外

- ・丸樹長三郎死去



ダルマストーブ(大野哲司)

1979年 川俣美術^{時代}



男の顔(佐久間弘行)

- ・川俣美術に改名(1979年)
町民が親しめるようにと改名。
会長は高橋一蔵、事務局は高橋
歌子で新しいスタートを切る。



祈り(菅野サツキ)

- 高橋歌子、米寿記念個展を機に
川俣美術事務局長を退く。会長
に菅野浪男、副会長に斎藤三男、
事務局に佐久間弘行。



丸樹長三郎氏

戦後、東京では新しい美術団
体が次々と誕生しました。コバ
ルト社も新規会員の加入に伴い
「ラ・パレット」と改名。川俣か
らも新しい風を起こそうと会員
の活躍の舞台は全国へ広がって
いきました。1979年には、
より町民が美術に親しめるよう
にと「川俣美術」へ改名。丸樹
の後継者として日本画家であつ
た高橋歌子が立ち上げに大きく
貢献しました。また、高橋は川
俣美術のみならず、福島青年美
術の旗揚げや川俣美術の県文化
賞受賞にも寄与しました。



ラ・パレット、
そして川俣美術へ